

# 大学図書館サービスに対する学生の認知構造

山田 覚<sup>1</sup> 渡邊桂子<sup>2</sup> 下元有加<sup>2</sup> 吉本悠子<sup>2</sup> 梅原博子<sup>2</sup> 名和真一<sup>3</sup> 風間 裕<sup>4</sup>

(2015年9月30日受付, 2015年12月17日受理)

Structure of the service recognition of the students on the university library

Satoru Yamada<sup>1</sup>, Keiko Watanabe<sup>2</sup>, Yuka Shimomoto<sup>2</sup>, Yuko Yoshimoto<sup>2</sup>, Hiroko Umebara<sup>2</sup>,  
Shinichi Nawa<sup>3</sup>, Hiroshi Kazama<sup>4</sup>

(Received: September 30. 2015, Accepted: December 17. 2015)

## 要 旨

本研究の目的は、大学生や大学院生の大学図書館サービスの認知の構造を明らかにし、どのような図書館サービスが必要で、更にそれらサービスを十分に利用してもらうためには、図書館として何をすべきか検討し、図書館サービスの向上に資する資料を得ることである。評定尺度によるアンケートを作成し、本学の全学生に対し、図書館サービス認知度を調査した。図書館サービス認知は、「図書資料の貸出しと返却サービスの認知」、「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」、「基本的な図書館運営サービスの認知」、「論文の検索と取り寄せサービスの認知」という4つの因子構造を持っていた。従来の基本的な図書館サービスを充実することはもとより、学部の図書部会員と相談しながら、更に効果的なオリエンテーションを計画・実施する必要があることがわかった。また、それに加え、レファレンスに代表される知の循環を促進する学習支援サービスが必要であり、そのためには大学の構成学部等を理解し、利用者との意見交換を通して互いを理解するとともに、コミュニケーション能力を上げる必要があることがわかった。

キーワード：大学図書館、図書館サービス、図書館サービス認知

## Abstract

The purpose of this study was that structure of the recognition of the library service of the university student was clarified, and the document which contributed to the improvement of the library service was provided.

For all students, an investigation was done library service recognition. The library service recognition was comprised by four factors called “rental and the return service of the book document”, “special services such as the cooperation with other libraries”, “basic library administration service”, “a search and the order service of the article”. It is necessary for enough basic library services and effective orientation to be carried out and for it to be performed learning support of giving a service. Therefore a librarian is understood to be a user each other, and it is necessary for communicative competence to be improved.

Key word: university library, library service, library service awareness

---

1. 高知県立大学総合情報センター 教授 工学博士  
2. 高知県立大学総合情報センター 図書情報部職員  
3. 高知県立大学総合情報センター 助教 理学博士  
4. 高知県立大学総合情報センター 准教授 理学博士

Integrated Information Center of University of Kochi  
Integrated Information Center of University of Kochi  
Integrated Information Center of University of Kochi  
Integrated Information Center of University of Kochi

## 1. はじめに

大学生の図書館離れが指摘されて久しいが、アクセシブルな図書館の検討が、障害学生の支援も含め、電子図書館化を通して検討されている(松原、2015)。また、電子図書館化の1つとして図書館サービスのオープンソフトウェアの議論もされており(高久、2014)、IT化の流れの中で、図書館離れの対応が検討されるようになった。更に、書籍そのものを電子化する電子書籍に加え、それを如何に読者の手元に届けるかという、電子書籍の公開システムも大学図書館で検討されている(餌取、2014)。一方、文献のアクセス性など、本来の図書館サービスの充実も議論されており(操田、2015)、図書館のIT化の流れの中で、本質的な図書館サービスの検討の必要性が指摘されている。文部科学省(2015)では、「これからの図書館の在り方検討協力者会議」を主催し、その議論の結果として、これからの図書館サービスの在り方を示している。その中で、大学図書館に関わる事項として、レファレンスサービス、専門的情報の提供、閲覧・貸出・リクエストサービス、図書館資料の整備と提供などを挙げている。また、最近各大学で検討され導入され始めたラーニング・コモンズに関する検討(田中、2014)も多くなっている。更に、アクティブラーニング型の授業設計が求められており、図書館の機能の一部としてそれを支援する学習や教育環境の充実が指摘されている(長沢、2012)。

本学も、学生への図書館サービスの向上を目指し、ラーニング・コモンズに関する基礎調査を行い(風間 他、2013、名和 他、2013、山田 他、2014)、学生の専門性の差異による大学図書館サービスの認知と利用状況の違いについて分析を行って来た(山田 他、2015)。

そこで本研究は、大学生や大学院生の図書館サービスの認知の構造を明らかにし、どの様な図書館サービスが必要で、更にそれらサービスを十分に利用してもらうためには、図書館として何をすべきか検討し、図書館サービスの向上に資する

資料を得ることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 1) 研究の枠組み

本研究を含む大学図書館のサービス向上を最終目的とする研究の枠組みを検討した。図1に示す様に、大学図書館サービスの認識の程度、利用の程度、サービスの満足の程度により、総合的な評価をし、それら個々の視点およびそれらの関係性の分析から得られた示唆により、図書館のサービスを向上させることができると考えた。本稿では、研究の目的を踏まえ、図中の「利用者の図書館サービスの認識の程度」に着目した。

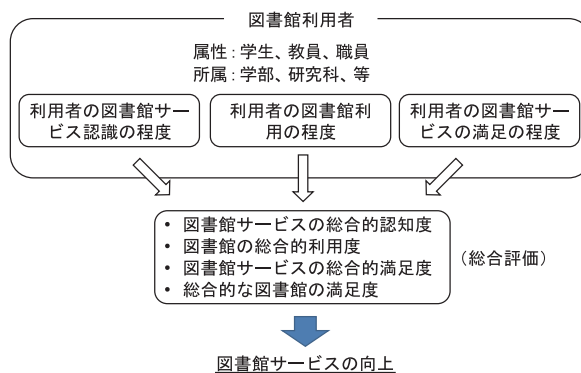


図1 図書館サービスの認知、利用と満足度

### 2) 研究対象者

高知県立大学の学部生・大学院生および高知短期大学生。

### 3) データ収集方法

図書館サービス認識の程度(以後、認知度)、図書館利用の程度、図書館サービスの満足の程度、および総合的認知度に関し、5段階の評定尺度(−2:まったくそう思わない~+2:とてもそう思う)による質問項目を作成し、前述の研究対象者に、平成25年12月から平成26年1月にアンケート調査を実施した。(資料参照:質問項目)

### 4) 分析対象データ

本稿においては、研究目的に対応させ、図書館サービスの認知度(資料「質問項目」:4)~8)、

10)～15)、17)、18)、21)、22)、29)、34)、36)の18項目)を分析対象とした。

### 5) データ分析方法

アンケート調査により収集したデータを統計的に解析した。

- (1) 対象データの各質問項目の平均値と標準偏差を、学部等のデータ群に対して算出した。尚、標準偏差は、平均値と同一のグラフ上に表示する必要から、便宜上折れ線グラフで表示した。
- (2) 収集した認知度のデータを、最尤法による因子分析(プロマックス回転)を行った。固有値1以上、因子負荷量0.3以上を変数の採択基準とした。

### 6) 倫理的配慮

所属する組織の研究倫理審査委員会の倫理審査を受審し、調査の許可を得て実施した。また、研究対象者の所属する各学部の学部長、各研究科の科長および短期大学の副学長の承諾を得、研究対

象者には、研究の目的や内容などを説明し、同意の得られた者のみを対象者とした。

## 3. 結果

### 1) データの回収

1,371部を配布し、402部を回収(回収率29.3%)した。そのうち、所属欄が選択されていない14部を除き、388部を分析対象とした。(回答率96.5%)

### 2) データの属性

分析対象となったデータは、学部等別では、文化学部22.4%、看護学部28.9%、社会福祉学部25.8%、健康栄養学部9.3%、大学院7.2%、短期大学6.4%であった。また、学年別では、1回生41.3%、2回生15.7%、3回生14.4%、4回生28.7%であった。

### 3) 内的整合性

クロンバック・アルファ係数は、0.881であった。

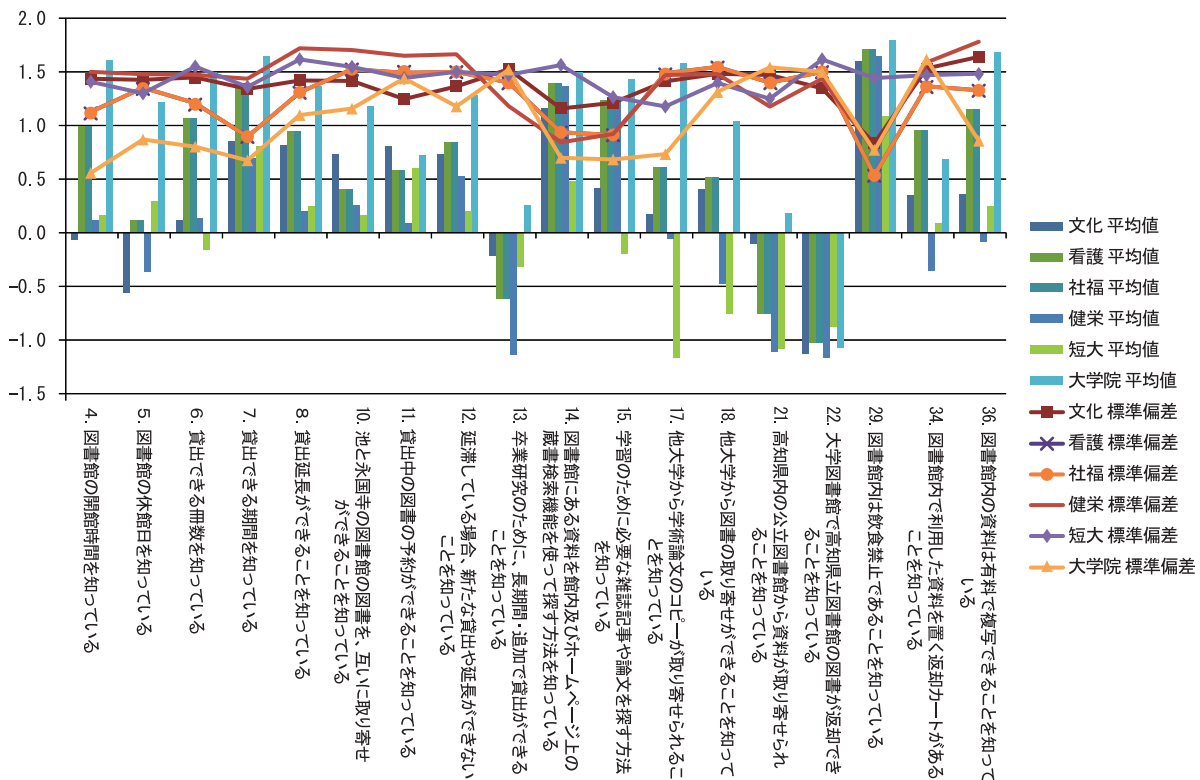


図2. 図書館のサービス認知度

## 4) 図書館のサービス認知度

図2の通り、学部等により差異があることがわかった。全体的に大学院の認知度が高く、バラツキが比較的小さかった。

## 5) 図書館サービス認知の構造

因子分析の結果、変数29と36は因子負荷量が0.3を満たしていなかったため、それらを削除して因子分析をやり直した。その結果、因子抽出後の回転前の累積負荷量平方和は、46.46であった。表1に因子分析の結果のパターン行列を示す。表1の変数名は、変数番号に「・・・を知っている」の「・・・」の部分のみ記述している。

第1因子は、8. 貸出延長ができることを知っている。11. 貸出中の図書の予約ができることを知っている。12. 延滞している場合、新たな貸出や延長ができないことを知っている。7. 貸出できる期間を知っている。34. 図書館内で利用した

資料を置く返却カートがあることを知っている、という借出しと返却に関する変数により構成されていることから、「図書資料の貸出しと返却サービスの認知」と命名した。

第2因子は、21. 高知県内の公立図書館から資料が取り寄せられることを知っている。22. 大学図書館で高知県立図書館の図書が返却できることを知っている。13. 卒業研究のために、長期間・追加で貸出ができることを知っている。10. 池と永国寺の図書館の図書を、互いに取り寄せができることを知っている、という他の図書館との相互サービス等の他館連携、および長期間や追加借出し等の特殊なサービスの変数から構成されていることから、「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」と命名した。

第3因子は、5. 図書館の休館日を知っている。4. 図書館の開館時間を知っている。6. 貸出できる冊数を知っている、という図書館の運営に関

表1 サービス認知のパターン行列

	因子			
	1	2	3	4
8. 貸出延長ができること	.671	.007	-.061	.013
11. 貸出中の図書の予約ができること	.631	.347	-.137	-.064
12. 延滞している場合、新たな貸出や延長ができないこと	.562	.162	.043	.011
7. 貸出できる期間	.539	-.058	.282	.034
34. 図書館内で利用した資料を置く返却カートがあること	.336	.036	.090	.071
21. 高知県内の公立図書館から資料が取り寄せられること	-.006	.705	.068	-.002
22. 大学図書館で高知県立図書館の図書が返却できること	.020	.499	.107	-.148
13. 卒業研究のために、長期間・追加で貸出ができること	.209	.420	.003	-.068
10. 池と永国寺の図書館の図書を、互いに取り寄せができること	.353	.374	-.089	.107
5. 図書館の休館日	-.096	.186	.865	-.097
4. 図書館の開館時間	.070	-.059	.667	.125
6. 貸出できる冊数	.371	-.025	.394	.043
17. 他大学から学術論文のコピーが取り寄せられること	-.144	.181	.021	.781
18. 他大学から図書の取り寄せができること	-.069	.460	-.019	.584
15. 学習のために必要な雑誌記事や論文を探す方法	.229	-.232	.014	.544
14. 図書館にある資料を館内及びホームページ上の蔵書検索機能を使って探す方法	.314	-.242	.001	.531

する基本的なサービスの変数から構成されていることから、「基本的な図書館運営サービスの認知」と命名した。

第4因子は、17. 他大学から学术论文のコピーが取り寄せられることを知っている。18. 他大学から図書の取り寄せができることを知っている。15. 学習のために必要な雑誌記事や論文を探す方法を知っている。14. 図書館にある資料を館内及びホームページ上の蔵書検索機能を使って探す方法を知っている、という文献複写や相互貸借の変数から構成されていることから、「論文の検索と取り寄せサービスの認知」と命名した。

因子相関行列は、表2に示す通りであり、第1因子と第3因子、第1因子と第4因子、第2因子と第4因子にそれぞれ相関が認められ、第1因子と第2因子および第3因子と第4因子にそれぞれ弱い相関が認められた。これらの関係を図示すると図3の通りである。黒矢印は相関係数0.4以上を、白抜き波線矢印は相関係数0.3~0.4を表している。

#### 6) 専門性別因子得点

図4に各学部等の因子得点の平均値をレーダーチャートにて表した。全ての因子において最も平均が高いのは大学院生であり、満遍なく全ての因子の要素を含んでいる。次に平均が高いのは看護学部生で、大学院生と同様に因子による偏りは余り見られないが、第2因子の「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」においては、相対的に因子得点がマイナスとなっている。社会福祉学部生と健康栄養学部生は、ほぼ同様のパターンで、健康栄養学部生の第2因子の「他図書館との

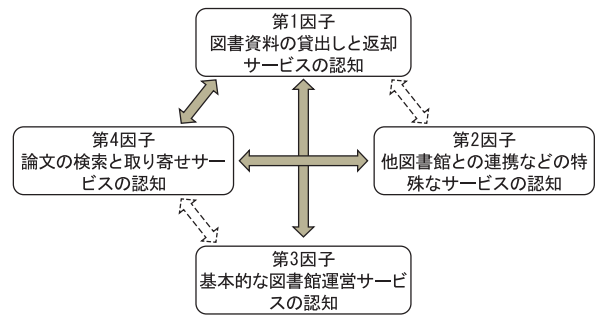


図3 各因子の関係

連携などの特殊なサービスの認知」が他の因子に比して低い値となっている。また、全ての平均得点がマイナスである。文化学部生は、因子による偏りが大きく、第2因子の「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」が大学院生に次いで平均値が高く、プラスの値となっている。一方、第3因子の「基本的な図書館運営サービスの認知」は他の学部生等と比べ最も低くなっている。短期大学生は、更に因子による偏りが大きく、第4因子の「論文の検索と取り寄せサービスの認知」が極端に低い。他の因子は、社会福祉学部生や健康栄養学部生と同様か、若干高い平均値を示している。

## 4. 考察

### 1) 図書館サービス認知の構造

図書館のサービス認知は、「図書資料の貸出しと返却サービスの認知」、「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」、「基本的な図書館運営サービスの認知」、「論文の検索と取り寄せサービスの認知」という4つの因子構造を持っていた。第1因子は、図書館の一般利用に関する認知であり、図書館サービスの基本知識であることがわかる。第2因子は、自館で対応できない場合でも、他館との相互貸し出しや館を超えた返却サービスであり、即ち図書館のネットワークを巧みに利用できるサービスの認知である。第3因子は、図書館の基本的な運営上のサービスの認知であり、図書館利用の前提となるサービス認知である。第4因子は、自館の図書資料を書架にて探せばかりで

表2 因子相関行列

因子	1	2	3	4
1	1.000	—	—	—
2	0.337	1.000	—	—
3	0.494	0.139	1.000	—
4	0.486	0.539	0.316	1.000

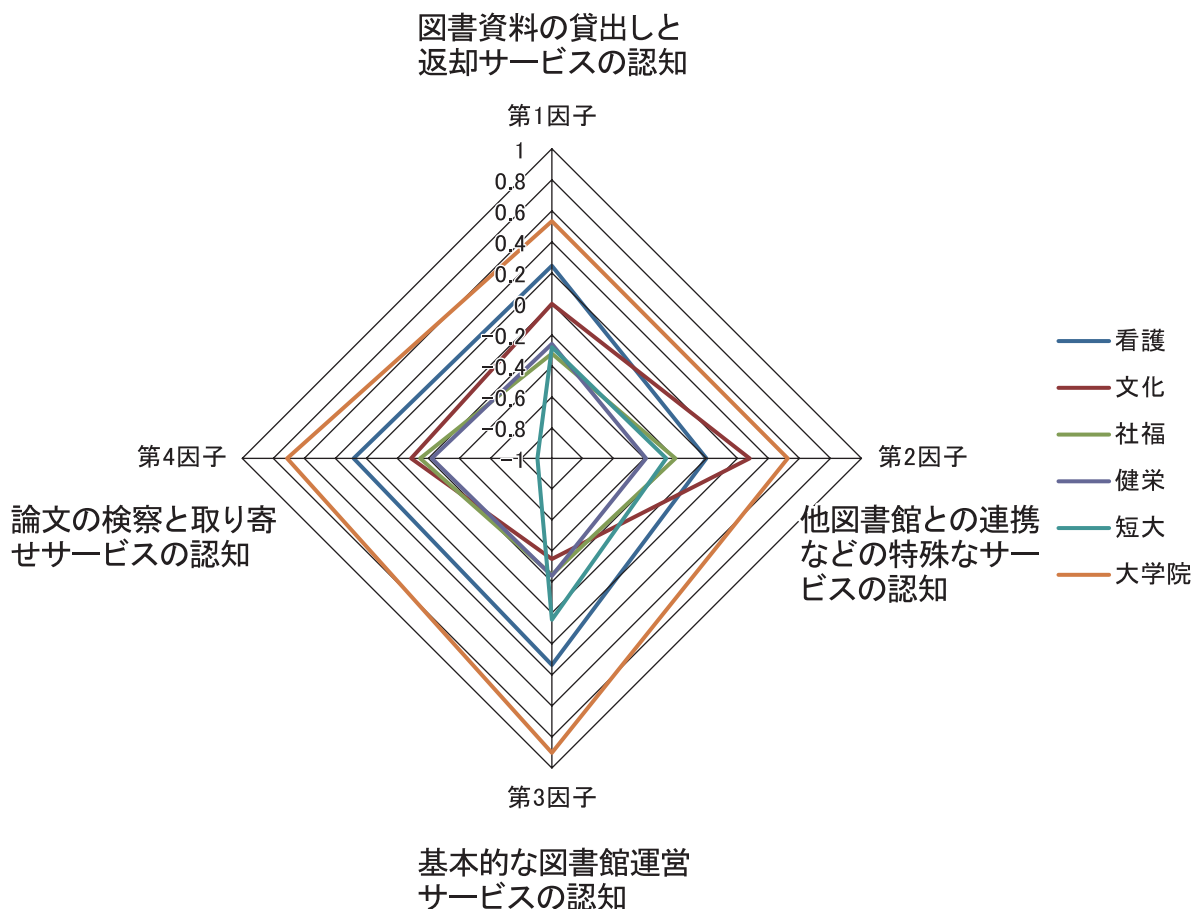


図4 各学部等の因子得点の平均

はなく、OPAC や電子ジャーナルの検索機能を用いたり、更に自館に無い場合は、他館から取り寄せたりする高度なサービスの認知である。これらは、所謂レファレンスサービスであり、文部科学省(2015)が図書館の在るべき姿として挙げているサービスの1つであり、操田(2015)が指摘している従来の図書館サービスである。山口ら(2015)は、図書館員の研究支援という視点から、医学系の事例を通してレファレンスサービスの実態を示し、その専門性に即したサービス提供の必要性を示している。また、平(2014)も看護職者等に対する大学図書館のサービスとして、利用者との相互理解を深めることにより、より効果的なサービス提供が可能となり、そのためには利用者との意見交換を通して、コミュニケーション能力を培うことを指摘している。

また、それぞれの因子間の関係は、図3の通り

であり、第2因子の「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」と第4因子の「論文の検索と取り寄せサービスの認知」の間の相関係数が最も大きく、自館ばかりではなく、他館を上手く利用しながら、欲しい図書資料を取得できることを知っており、図書館サービスを図書館のネットワークと共に上手に使いこなす知識をもっていると考えられる。また、第1因子と第3因子の関係も比較的強く、基本的な図書館利用の認知である。

## 2) 構造から見た専門性の差異による図書館のサービス認知

大学院生の図書館サービスの認知度は高く、また各因子の得点も高く、図書館サービスの利用の仕方を良く知っていると思われる。更に、それぞれのサービスの認知度の偏りは少なく、どれもプラスの値となっている。特に、第3因子の「基本



的な図書館運営サービスの認知」の得点が高く、休館日や開館時間の情報、そして貸し出し冊数の基本サービスの情報を熟知して、効率的なサービス利用ができるようにしている。看護学部生も大学院生と同様のパターンで、第2因子の「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」の平均値を除き因子得点の平均はプラスであり、基本的な図書館サービスを知っている。看護学部の場合は、県下の他館で専門性の高い多くの図書資料を蔵書しているところが無く、そもそも周辺他館利用はあまり無いと思われる。文化学部生の第2因子の「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」の得点が高いのは、文化学部が専門とする文学系や人文系の図書資料が、地元に関する資料として県下の他館に多く蔵書されているため、他館とのネットワークを用いた利用を知っているものと考えられる(山田, 2015)。しかし、学会誌が少ない分野であることから、電子ジャーナルの利用は少なく、他館からの図書資料の取り寄せも少ないと思われる。また、自館の運営情報も比較的知らず、あまり図書館サービスを利用していないと考えられる(山田, 2015)。社会福祉学部生や健康栄養学部生は、因子得点のパターンは大学院生や看護学部生とほぼ同様であるが、全ての因子得点が低く、図書館のサービスをあまり知らないと思われる。特に、健康栄養学部生は、長期貸出しや他館からの資料の取り寄せなど、あまり他館との連携によるサービスを利用していないことが窺える(山田, 2015)。このことにより、学部生に対する、図書館の基本サービスの説明の充実が望まれる。短期大学生は、第4因子の得点が非常に低いことが特徴で、必要な図書資料の検索および取り寄せ方法を知らない。これは、カリキュラム上、卒業研究等の探索型教育の深度の違いもあるものと思われる。

### 3) 大学図書館サービスの在り方

本学の学生に対する図書館サービスに関する説明は、入学時のオリエンテーションと、各学部等

の教育の仕方に対応した、必要な時期における教員あるいは司書による図書館サービスの説明である。大学院生は、教育上あるいは各学生の学習上の必然性から、図書館を如何に効果効率的に利用するかという意識が高く、サービスの認知は非常に高い。よって、入学時以外での説明も、電子ジャーナルの利用等、高度なサービスの説明となっている。学部生に対する説明は、まずは基本的なサービスを説明し、利用方法を理解してもらうことである。しかし、大学の本質である教育と研究の視点からは、自館の図書資料の検索や、更に他館の図書資料の検索とともに、文献取り寄せサービスの説明が必要と思われる。特に、大学院生に対しては、図書館サービスの本質であるレファレンスサービスを活用してもらいたい。

小笠原ら(2014)は、従来の教育や研究のための知識資源を提供する大学図書館から、これに加え知識の創造と発信を支援するサービスを「知の循環」モデルとして提案しており、それに携わるオペレーターの必要性を指摘している。知の循環モデルとは、利用者が図書館を通して知識資源から必要な知識を受領し、それを蓄積することにより利用者は新たな知識の創造をし、その結果を図書館を通して発信することにより、それが知識資源に更に加えられて行くというものである。大学図書館員は、従来の機能に加え、レファレンス等により利用者の研究支援を更に充実し、リポジトリなどを通して新たな知の発信支援をするなど、知の循環のオペレーター役割を担うべきであり、米谷ら(2014)も、大学における図書館サービスの拡大を指摘している。

## 5. 結論

図書館のサービス認知は、「図書資料の貸出しと返却サービスの認知」、「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」、「基本的な図書館運営サービスの認知」、「論文の検索と取り寄せサービスの認知」という4つの因子構造を持っていた。また、「図書資料の貸出しと返却サービスの認知」

と「基本的な図書館運営サービスの認知」の関係が比較的強く、基本的な図書館利用のサービス認知構造であった。一方、「他図書館との連携などの特殊なサービスの認知」と「論文の検索と取り寄せサービスの認知」の間の相関係数が最も大きく、自館ばかりではなく他館の利用による図書資料の取得方法の認知構造が特徴的であった。

学生に図書館を更に利用してもらうためには、従来の基本的な図書館サービスを充実することが必要であり、具体的には図書館サービスの認知度が低い学部生に対し、図書館員は学部の図書部会員と相談しながら、更に効果的なオリエンテーションを計画・実施する必要がある。また、それに加え、レファレンスに代表される知の循環を促進する学習支援サービスを更に充実する必要があり、そのために図書館員は大学の構成学部等を理解し、利用者との意見交換を通して互いを理解するとともに、コミュニケーション能力を上げる必要がある。

図書館システムの機能改善により、キャンパス間および県内図書館の図書の取り寄せを行う物流サービスがよりスムーズになるなど、基本的な図書館サービスは改善されている面もある。大学図書館としては、基本的サービスだけでなく、学習支援サービスをいかに提供していくか対応策を常に見出していかなければならない。

## 6. 今後の課題

これまでの一連の研究を通して、利用者の図書館サービスの認知や利用に関する現状と特性が明らかとなり、図書館サービスの向上に資する資料が蓄積されて来た。今後は、これらの貴重な資料を基に、図書館として図書資料の借出しなどの基本的利用に関する研修や、効果的な文献取り寄せサービスの利用研修企画など、具体的な改善活動に着手する必要がある。個々の図書館職員自身もまた、学部構成に添ったより専門性の高いレファレンスサービスを提供するための研鑽を積み重ねなければならない。

最後に、本研究にご協力頂いた皆様に厚くお礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 餌取直子、森いずみ：お茶大図書館発のイノベーション — 「お茶の水女子大学 E-book サービス」に見る大学図書館の未来 —、大学図書館研修、12、6-14、2014
- 小笠原正豊、野城智也：新しい大学図書館に要求される機能についての一考察 「知の循環」モデル、日本建築学会大会学術講演梗概集、895-896、2014
- 風間 裕、名和真一、山田 覚：図書館の学習環境 I — 情報収集および住環境に焦点を当てて —、高知県立大学紀要センター編、62、1-10、2013
- 高久雅生：図書館サービスとオープンソースソフトウェア、情報の科学と技術、64(2)、48-53、2014
- 田中隆一郎、大山真司、中井孝幸：利用目的と利用行為からみた大学図書館像 — 居場所としての大学図書館の施設計画に関する研究 その1 —、日本建築学会大会学術講演梗概集、423-424、2014
- 操田智晴：大学図書館サービスの一考察、京都大学図書館機構報「静脩」、32(4)、<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/bull/jpn/s324/Se12103.html> (平成27年9月18日閲覧)
- 長澤多代：大学図書館が実施する学習支援・教育支援サービス 北米の事例から見えるもの：平成24年度第1回東海地区大学図書館協議会研修会資料、22-33、2012
- 名和真一、風間 裕、山田 覚：図書館の学習環境 II ~ 情報分析および情報創出・共有環境に焦点を当てて ~、高知県立大学紀要センター編、62、11-21、2013
- 平 紀子：看護職と学生のための大学図書館サービス、看護と情報、21、43-48、2014
- 米谷優子、北 克一：大学生の情報活用の現況と



- 大学図書館サービスの課題 ―情報検索及び利用に関するアンケート調査を踏まえて―、情報学、11(1)、51-59、2014
- 松原洋子：アクセシブルな電子図書館と読書困難な学生の支援 ―日本における大学図書館サービスの課題と展望―、立命館人間科学研究、31、65-73、2015
- 文部科学省：これからの図書館サービスの在り方、「これからの図書館の在り方検討協力者会議」これまでの議論の概要、[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/tosho/giron/05080301/001/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/giron/05080301/001/003.htm) (平成27年9月18日閲覧)
- 山田 覚、風間 裕、名和真一：図書館の学習環境～多利用群と少利用群の比較を通して～、高知県立大学紀要センター編、63、1-12、2014
- 山田 覚、鍋島博之、渡邊桂子、下元有加、吉本悠子、石元栄子、梅原博子、上村由佳、大原歩、風間 裕、名和真一：大学図書館サービスの認知と利用状況 ―学生の専門性の差異を通して～、高知県立大学紀要センター編、64、1-11、2015
- 山口直比古、平輪麻里子古：図書館員の研究支援―医学系図書館の事例から―、情報の科学と技術、64(6)、213-217、2014

### 〈資料〉

#### 質問項目

1. 図書館のサービスについて知っている
2. 図書館を利用している
3. 図書館のサービスに満足している
4. 図書館の開館時間を知っている
5. 図書館の休館日を知っている
6. 貸出できる冊数を知っている
7. 貸出できる期間を知っている
8. 貸出延長ができることを知っている
9. キャンパスの情報処理(情報演習室のパソコンの性能やインターネットのスピードなど)の環境は、もっと充実すべきである
10. 池と永国寺の図書館の図書を、互いに取り寄せができることを知っている
11. 貸出中の図書の予約ができることを知っている
12. 延滞している場合、新たな貸出や延長ができないことを知っている
13. 卒業研究のために、長期間・追加で貸出ができることを知っている
14. 図書館にある資料を館内及びホームページ上の蔵書検索機能を使って探す方法を知っている
15. 学習のために必要な雑誌記事や論文を探す方法を知っている
16. 学術論文を探す方法は教員に教えてもらっている
17. 他大学から学術論文のコピーが取り寄せられることを知っている
18. 他大学から図書の取り寄せができることを知っている
19. 論文や図書の他大学からの取り寄せサービスを利用している
20. 近隣の公立図書館を利用している
21. 高知県内の公立図書館から資料が取り寄せられることを知っている
22. 大学図書館で高知県立図書館の図書が返却できることを知っている
23. 図書館で利用できる種々のサービスが周知できていると思う
24. 貸出可能冊数が少ないと思う
25. 貸出期間が短いと思う
26. 図書館のホームページを利用したことがある
27. 図書館を利用する前に休館日を確認する
28. 図書館内で飲食をしたことがある
29. 図書館内は飲食禁止であることを知っている
30. 一般利用者に図書館を開放していることは良いことである
31. 所属するキャンパスの図書館の閲覧席の数が少ないと思う
32. 図書館の資料は検索用パソコン(OPAC)で検索する
33. 検索結果の配架場所表示を確認して、資料を取りに知っている
34. 図書館内で利用した資料を置く返却カートがあることを知っている
35. 図書館内に掲示している館内図を利用している
36. 図書館内の資料は有料で複写できることを知っている
37. 図書館の開館時間に満足している
38. 図書館の休館日に満足している
39. 貸出できる冊数に満足している
40. 貸出できる期間に満足している
41. 貸出延長ができることに満足している
42. 互いのキャンパスの図書の取り寄せができることに満足している
43. 貸出中の図書の予約ができることに満足している
44. 延滞している場合、新たな貸出や延長ができないことに不満である
45. 卒業研究のために、長期間・追加で貸出ができることに満足している
46. 図書館の検索用パソコン(OPAC)の使いやすさに満足している
47. 図書館内は飲食禁止であることを知っている
48. 一般利用者に図書館を開放していることに満足している
49. 所属するキャンパスの図書館の閲覧席の数に満足している
50. 図書館内に掲示している館内図に満足している
51. 図書館内の資料を有料で複写できることに満足している
52. この図書館に満足している